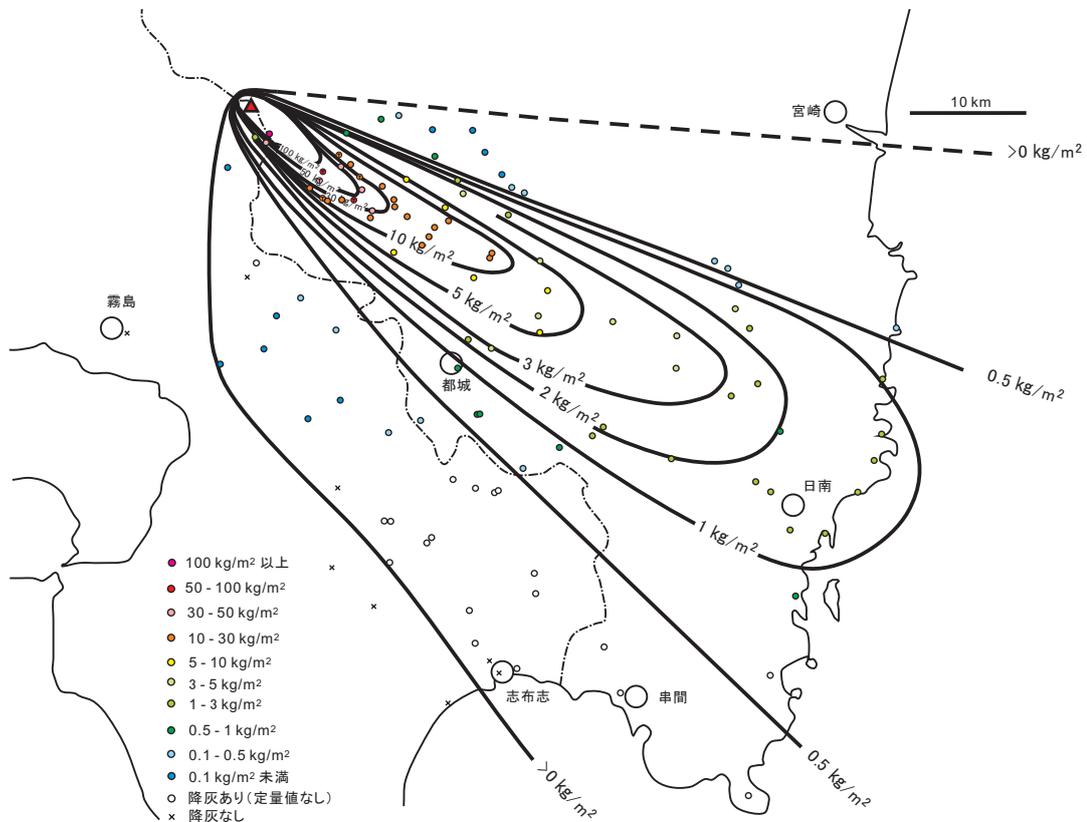
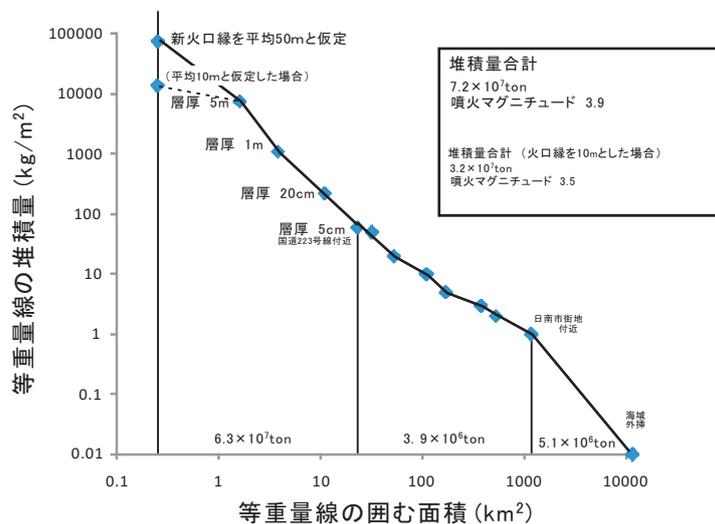


1月26-27日噴火のテフラ分布図及びそれから求められる噴出量(改訂)
(概算速報値: 5万分の1図上のアイソパックを次ページに追加)



アイソパック図. 産総研, 気象庁, 電中研, 日本工営による調査データを用いた.



計算に用いた仮定

- 1) 火口(新燃岳火口の中に生じた新しい噴出口)の面積を0.25km², その縁での層厚を平均50mと仮定. 新燃岳山頂火口南東側斜面のガリー等の地形の埋まり具合から, 新燃岳山頂火口から約500mの範囲まで最大層厚5m程度の地域が広がっていると推定. 実際に調査した地域の等層厚線を火口近傍まで外挿した場合の層厚と矛盾しない(上図)
- 2) 層厚5mより厚い部分の密度を1500kg/m³. それより薄い軽石層の部分を実測値の平均から1100kg/m³と仮定
- 3) 遠方は, 0.011kg/m²の等重量線まで計算. その面積は, 1kg/m²の線が囲む面積の10倍と仮定.

参考: 得られた等重量線すべてに, Hayakawa 1985の方法を適応し, その単純平均を求めると, 3.2 × 10⁷ ton

等重量線-面積相関図とそれから求められる噴出量